

物故会員

藤田 湘子

ふじた しょうし 俳人 1926 - 2005.4.15 神奈川県小田原市に生まれる。句集『神楽』により詩歌文学館賞。水原秋櫻子に師事し「馬酔木」同人及び編集長を経て、昭和三十一年(1956)「鷹」を創刊、主宰。子規、虚子の風を慕い独特の俳味に富む境涯句を終生うちだし、蛇笏賞選者、日経俳壇選者なども長く務めた。掲載句は、没後平成十八年(2006)に編まれた最後の第十一句集、角川書店四月十五日刊『てんてん』より、遺族の承諾を得て編集室(秦恒平)が抄録した。句集題は生前俳人みずから撰していた好題で、どのようにも解され「特に意味はない」と自身言いつつ、久しい句風を軽やかに収束し得ている。

てんてん 抄

虚空ゆく禽(とり)の目ふたつ大旦 平成十一年(1999)

悪(わる)なれど町内の初鴉なり

うれしくも淋しくもなし福寿草

粥にほと落せし黄味や寒四郎

野火見つつ人間不信今更に

たんぽぽと一本道とあそびをり

たくさんの返事を持つて春の雲

一礼の衿きよらなり光悦忌

目刺一連うまれかけては消ゆる詩よ

ひとりこそ自在や花の蕊に虻

湖の藻にささめく小蝦(こえび)涅槃西風(ねはんにし)

先生の春の日記の犬のこと

金の虻よろめき出でし牡丹かな

茶漬食ふ五月某日薄情に

惚(とぼ)けても眉を上げても油照

冷房裡一個の噂成熟す

噴水や若者の腰ひよろひよると

くるぶしに触れたる木賊(とくさ)土用入

帚木(ははきぎ)やある日羨(とも)しき子規の才

空蝉(うつせみ)を拾へば笑ひ天よりす

芋の露不意をくらつて零(こぼ)れけり

秋刀魚(さんま)食ふ曾(か)つて男は凜たりし

桐一葉面(おもて)をあげて落ちにけり

舞茸(まひたけ)は雲のごとくに鍋の脇

うしろからうむを言はせず秋の暮

枯菊の面目(めんもく)ほどの香なりけり

弓始(ゆみはじめ)弓の形の国なれば

平成十二年(2000)

我はただ餅の黴削(そ)ぐむかし者

正月やああ少年に帽子なし

雪国や蕎麦きしきしと昼の酒

春隣帽子取りたるおでこかな

寒明や味噌をよろこぶ蒟蒻(こんにやく)も

消えかかる身を白魚は寄せ合へり

一握(いちあく)の芹の香けふをはかなくす

飯蛸食ふ腹の欲しがるものならず

そのくらゐ考へてをる目刺食ふ

春疾風(はるはやて)一本の矢を胸裡にす

春風や藪のやうなる古俳諧(こはいかい)

立ててある竹使途不明鯰池

暑けれど佳き世ならねど生きようぞ

羽蟻一匹文鎮一個灯を消しぬ

四五本のほたるぶくろが村境

鶏頭が立てり記憶の行止り

女人とも淡くなりけり新走(あらばしり)

家にゐて昨日とおなじ秋の暮

頭(あたま)寒し頭のかたち見えねども

牡蠣を食ふ何たる時間不足かな

雪の灯を通り過ぎたるこの世かな

行きずりの花舗(かほ)の初荷に跣(かが)みけり 平成十三年(2001)

餅食べて我はいつこへ行着くや

只管打坐(しくわんたざ)寒鯉(かんごひ)これを倣ひをり

豆撒いてから豆を食ふうらがなし

あるとしもなく白魚の鬚りあふ

春蚊打つ思ひつめたる声なれば

三椏(みつまた)の花咲き軍鶏(しやも)を盗(と)られしと

犬の目の高さ切なし春疾風(はるはやて)

春曙(はるあけぼの)我となるまでわれ想ふ

春雷(しゅんらい)のあと空箱を一つ潰す

春の暮死んでから読む本探す

わがままの出てきし春や刃物研ぐ

あかつきや枝の先まで水の春

けふ見たる桜の中に睡るなり

雪形を天にあそばせ花林檎

座禅草をんなの息に堪へてをり

尻上げて山風読むか鴉の子

蝸牛(ででむし)も夕雲燃ゆる刻(とき)に遇ふ

暑ければ慾を半分捨てにけり

黄金虫時計屋の灯に狂ひけり

ところてん昭和がふつと顔を出す

ピヤホール麦藁帽はどこに置くか

雷(らい)遠し大和の辻の土けむり

見えないが沼の鯰に綸(いと)垂らす

死者とまだ訣(わか)れてをらず白木槿(むくげ)

秋晴や手間隙(ひま)かけず晩年へ

酒持たず高きに登る高きは佳し

おのおのおも集ひしごとく糸瓜(へちま)垂れ

猪鍋(ししなべ)の忽ち煮ゆる冥加(みやうが)かな

日蔭出て冬川あさく流れをり

掌(て)に置けば木瓜(ぼけ)の実なども取柄(とりえ)かな

一對の塔木枯を奏で合ふ

悉く人に名のある寒さかな

垣に鍋釜干しし世ありき還らざる

餅焼いてをり美しき不安あり

月光も朴(ほお)の冬芽も矢の如し

綿虫や人は旅してひとと逢ふ

大年(おほとし)の口慰みの梅法師

豆撒きし枅二三日ありて消ゆ 平成十四年(2002)

死ぬ人の歩いて行くや牡丹雪

鶴かへる空ありガラス割れにけり

土手すこし駈けあがりたる野火の果

白日に蝶の交(さか)りしうつつかな

古雛(ふるひいな)雨夜(あまよ)の面(おもて)あげてをり

我のほか人の居らねば地虫出づ

加賀にあり田螺(たにし)煮る火を見てゐたる

蝸牛(ででむし)と生れて奈良の竹垣に

一塊のででむし動くああさうか

ゆふぞらの白鷺のみち魂迎(たまむかへ)

昼寝覚紙のごとくにふはと泛(う)く

夏の山見てどんみりと男なり

炎帝や蔵書もひそかなる息す

マクベスの科白(せりふ)がふつといなびかり

鉄瓶のだんだん重き夜長かな

冬蝶と亦逢ふ何か起るらん

夕景の森あり寒き距離と思ふ

天井や暮も十日の馬喰町(ばくろちやう)

水仙や明日(あした)の晩といふ期待 平成十五年(2003)

鬼の死のこと伝はらず鬼やらひ

餅腹や大往生を父に謝す 一月十七日父死す。百一歳なりき。

涅槃図に顔寄せ俳句亡者かな

恋猫のふくろふ貌(がほ)の難儀かな

春の炉や寝鳥のこゑの一度きり

町角や次の角より春の人

ぺしやんこの紙風船の時間かな

皆がみな途方に暮れて葱坊主

昼花火空威張(からみぱり)して終りけり

稚魚たちの鱗はねむらず夏の月

一竿に青梅満たし懈怠(けたい)なし

考への行止りより黒揚羽(くろあげは)

雪溪(せつけい)を雲行き大き無音過ぐ

草の名にくはしき老女夏休

雁渡老いて筆絶つ人のこと

いわし雲虚子と遍路をしたかりし

秋の蜂堂々と行く何やある

枯山へわが大声の行つたきり

寒念佛(かenneぶつ)材木置場から出発 平成十六年(2004)

一月はどどどと過ぎぬ昼のめし

我瘦せて鴉太りぬ寒の内

丘ひとつ越え探梅(たんばい)のつもりなり

斑鳩(いかるが)の道や総出のいぬふぐり

美しきひとの案内(あない)や涅槃像

浦ひとつ灯をゆたかにす桜鯛

更衣(ころもがへ)寄席(よせ)へ行く日を胸づもり

眼を閉ぢて穂麦の痛さ記憶せり

町を出て道くつろげり山法師

松蝉に絵本は王の死ぬ頁

鷹孤(ひとり)り夏夕ぐれの避雷針

ひとすぢの風が月から夕黄菅(きすげ)

わが瘦躯立てば従ふ甚平かな

大雷雨ぺんぺん草は立ち向ふ

かやつり草蚊帳(かや)無くなつてしまひけり

炎天の雀翔ぶときほの白し

こつてりと鶏頭は色厚うせり

秋の蚊の金切声を落しけり

手術経し腹の中まで秋の暮

種採の嗟々々(あああ)零してしまひけり

遠方に椋鳥(むく)の群落つ生きたしよ

大山(だいせん)や枯は怠惰の色ならず

幾つかは遺品とならむ冬帽子

凍鶴(いてづる)が動き四五人うごきけり 平成十七年(2005)

文藝に修羅無くなりぬみやこ鳥

野道からぬかるみが消え小正月

薄氷(うすらひ)の居ながらにして消えにけり

春夕好きな言葉を呼びあつめ

今以つて寝巻と言ふやあたたかし

木蓮の声なら判る気もすなり

墨東に食ふこと稀や蓬餅

月細し隣近所の春のこゑ

死ぬ朝は野にあかがねの鐘鳴らむ 無季

億万年声は出さねど春の土

われのみぬ所ところへ地虫出づ

草川の水の音頭も春祭